

風の便り

太宰治

青空文庫

拝啓。

突然にて、おゆるし下さい。私の名前を、ご存じでしょうか。聞いた事があるような名前だ、くらいには、ご存じの事と思います。十年一日の如く、まずしい小説ばかりを書いている男であります。と言つても、決して、ことさらに卑下ひげしているわけではございません。私も、既に四十ちかくに成りますが、未だ一つも自身に納得の行くような、安心の作品を書いて居りませんし、また私には学問もないし、それに、謂いわば口重く舌重い、無器用な田舎者いなかもでありますから、濶かつたつ達な表現の才能に恵まれている筈はずもございません。それに加えて、生来の臆病者でありますから、文壇の人たちとの交際も、ほとんど、ございませんし、それこそ、あの古い感傷の歌のとおりに、友みなわれより偉く見える日は、花を買い来て妻と楽しんでいるような、だらしの無い、取り残された生活をしていて、ああ、けれども、愚痴は言いますまい。私は、自分がひどく貧乏な大工の家に生れ、気の弱い、小鳥の好きな父と、瘦やせて色の黒い、聡明な継母まははとの間で、くるしんで育ち、とうとう父母にそむいて故郷から離れ、この東京に出て来て、それから二十年間お話にも何もならぬ程の困苦に喘あえぎ続けて来たという事、それも愚痴になりそうな気が致しますので、

一さい申し上げませぬ。また、その暗いかずかずの思い出は、私の今日までの、作品のテーマにもなつて居りますので、今更らしく申し上げるのも、気がひける事でございます。ただ、私が四十ちかくに成つても未だに無名の下手な作家だ、と申し上げて、それは決して私の卑屈な、ひがみからでも無し、不遇を誇称して世の中の有名な人たちに陰険ないやがらせを行うというような、めめしい復讐心から申し上げているのでもない、本当に私は自分を劣つた作家だと思つて素直にそれを申し上げているのだという事をさえ、わかつて下さつたら、それだけで、私は有難く思います。

あなた、とお呼びしていいのか、先生、とお呼びすべきか、私は、たいへん迷つて居ります。私は、もし失礼でなかつたら、あなた、とお呼びしたいのです。先生、とお呼びすると、なんだか、「それつきり」になるような気がしてなりません。「それつきり」という感じは、あなたに遠ざけられ捨てられるという不安ではなく、私のほうで興覚めて、あなたから遠のいてしまふような感じなのです。何だか、いやに、はつきりきまつてしまふような、奇妙な淋しさが感ぜられます。私でさえも、時には人から先生と呼ばれる事がありますけれど、少しもこだわらず、無邪気に先生と呼ばれた時には、素直に微笑して、はい、と返事も出来ませんが、向うの人が、ほんのちよつとも計算して、意志を用いて、

先生と呼びかけた場合には、すぐに感じて、その人から遠く突き離れたような、やり切れない気が致します。「先生と言われる程の」という諺は、なんとという、いやな言葉でしょう。この諺ひとつの為に、日本のひとは、正當な尊敬の表現を失いました。私はあなたを、少しの駈引きも無く、嚴肅に根強く、尊敬しているつもりでありますけれども、それでも、先生、とお呼びする事に就いては、たいへんこだわりを感じます。他意はございません。ただ、氣持を、いつもあなたの近くに置きたいからです。私は肉親を捨てて生きて居ります。友人も、ございません。いつも、ただ、あなた一人の作品だけを目当に生きて来ました。正直な告白のつもりであります。

あなたは、たしか、私よりも十五年、早くお生れの筈であります。二十年前に、私が家を飛び出し、この東京に出て来て、「やまと新報」の配達をして居りました時、あなたの長篇小説「鶴」が、その新聞に連載せられていて、私は毎朝の配達をすませてから、新聞社の車夫の溜りで、文字どおり「むさぼり食う」ように読みました。私は、自分が極貧の家に生れて、しかも學歷は高等小学校を卒業したばかりで、あなたが大金持の（この言葉は、いやな言葉ですが、ブルジョアとかいう言葉は、いつそいいやですし、他に適切な言葉も、私の貧弱な語彙を以つてしては、ちよつと見つかかりそうもありませんから、ただ、

私の赤貧の生立ちと比較して軽く形容しているのだと解して、おしのび下さい。) 華族の当主で、しかもフランス留学とかの派手な学歴をお持ちになっていのに、それでも、あなたのお書きになっていいる作品に、そんな隔絶した境遇を飛び越えて、(共鳴、親愛、納得、熱狂、うれしき、驚嘆、ありがたき、勇気、救い、融和、同類、不思議などと、いろいろの言葉を案じてみましたけれど、どれも皆、気にいりません。重ねて、語彙の貧弱を、くるしく思います。) 少しも誇張では無く、生きていいる喜びを感じたのです。これでは、まるで、二十年前の少年に返ったような、あまい、はしやぎかたで、書いていながら冷汗が出る思いであります。けれども、悪びれず、正直に申し上げる事に致しましょう。

私は極貧の家に生れながら、農民の事を書いた小説などには、どうしても親しめず、かえって世の中から傲慢^{ごうまん}、非情、無思想、独善などと言われて攻撃されていたあなたの作品ばかりを読んで来ました。農民を軽蔑しているのではありません。むしろ、その逆であります。土農工商という順序に従えば、私は大工の息子です、ずっと身分が下であります。私は、農民の事を書いている「作家」に不満があるのです。その作品の底に、作家の一人間としての愛情、苦惱が少しも感ぜられませんか。作家の一人間としての苦惱が、幽^{かす}かにでも感ぜられないような作品は、私にとってなんの興味もございません。あなたの作品が、

「やまと新報」に連載せられていたのは、あれは、あなたが三十二、三歳の頃の事であったと思われませんが、あの頃、あなたが世の中から受けていた悪評は、とても、猛烈なものでありました。あなたは、完全に、悪徳漢のように言われていました。けれども、私は、あなたの作品の底に、いつも、殉教者のような、ずば抜けて高潔な苦悶の顔を見ていました。自身の罪の意識の強さは、天才たちに共通の顕著な特色のようであります。あなたにとつて、一日一日の生活は、自身への刑罰の加重以外に、意味が無かつたようでありました。午前一ぱいを生き切る事さえ、あなたにとつては、大仕事のようにありました。私は、「鶴」以来、あなたの作品を一篇のこさず読んでまいりました。あれから二十年、あなたは、いまでは明治大正の文学史に、特筆大書されているくらいの大作家になってしまいました。絢爛けんらんの才能とか、あふれる機智、ゆたかな学殖、直截の描写力とか、いまは普通に言われて、文学を知らぬ人たちからも、安易に信頼されているようであります。私は、そんな事よりも、あなたの作品にいよいよ深まる人間の悲しさだけを、一すじに尊敬してまいりました。「華嚴けごん」は、よかつた。今月、「文学月報」に発表された短篇小説を拝見して、もう、どうしてもじつとして居られず、二十年間の、謂わば、まあ、秘めた思いを、骨折つて、どもりどもり書き綴つづりました。失礼ではあつても、どうか、怒らないで下さい。

私も既に四十ちかく、髪の毛も薄くなつていながら、二十年間の秘めたる思いなどという女学生の言葉みたいなものを、それも五十歳をとうに越えられているあなたに向つて使用するのには、いかにもグロテスクで、書いている当人でさえ閉口している程なのですから、受け取るあなたの不愉快も、わかるように思います。どうも、他に、なんとも書き様がございませんでした。私は無学な作家です。二十年間、恥ずかしい瘦やせた小説を、やつと三十篇ばかり発表しました。二十年間、あなたはその間に、立派な全集を、三種類もお出しなさつて、私のほうは明治大正の文学史どころか、昭和の文壇の片隅に現われかけては消え、また現われかけては忘れられ、やきもきしたりして、そうして此頃は、また行きづまり、なんにも書けなくなりました。愚痴は申さぬつもりでありました。ありましたが、どうか、此の愚痴一つばかりは聞いて下さい。私は、批評家たちの分類に従うと、自然主義的な私小説家という事になつて居ります。それは、あなたが一口に高踏派こうとうはと言われているのと同じくらいの便宜上の分類に過ぎませぬが、私の小説の題材は、いつも私の身の茶飯事から採られているので、そんな名前をもらつて居るのです。私は、「たしかな事」だけを書きたかつたのです。自分の掌で、明確に知覚したものだけを書いて置きたかつたのです。怒りも、悲しみも、地団駄踏じだんだんだ残念な思いも。私は、嘘を書かなかつた。けれ

ども、私は、此頃ちつとも書けなくなりました。おわかりでしょうか。無学であるという事が、だんだん致命傷のように思われて来ました。私には手軽に、歴史小説も書けません。作品の行きづまりは、私のようなその日ぐらしの不流行の作家にとつて、すなわち生活の行きづまりでもあります。私に、何が出来るでしょう。私は戦地へ行きたい。嘘の無い感動を捜しに。私は真剣であります。もつと若くて、この脚気かっけという病気さえ無かったら、私は、とうに志願しています。

私は行きづまってしまいました。具体的な理由は、申し上げません。私は、あなたの「華嚴」を読み、その興奮から、二十年間の抑制を破り、思い切って手紙を書いたと前に申し上げましたが、実は、その興奮の他に、私の此の行きづまりをも訴えたかつたからであります。二十年間、私の歩んで来た文学の道に、このように大きな疑問が生じたのは、はじめての事であります。ぎりぎりに困惑したら、一言だけ、あなたのお指図をいただきたいと、二十年間、私は、ひそかに、頼みにして生きて来ました。少しでも、いじらしいとお思いになったら、御返事を下さい。二十年間を、決して押売りおしうりするわけではございませんが、もういまは、私の永い抑制を破り、思い切って訴える時のようであります。どうか、失礼の段は、おゆるし下さい。

私の最近の短篇小説集、「へちまの花」を一部、お送り申しました。お読み捨て下さい。ここは武蔵野のはずれ、深夜の松籟しょうらいは、浪の響なみきに似ています。此の、ひきむしられるような凄しささびの在る限り、文学も不滅と思われませんが、それも私の老書生らしい感傷で、お笑い草かも知れませぬ。先生（と意外にも書いてしまいましたから、大切にしてい、消さずに、そのまま残して置きます。）御自愛を祈ります。敬具。

六月十日

木戸一郎

井原退蔵様

拝復。

先日は、短篇集とお手紙を戴きました。御礼おくれて申しわけありませんでした。短篇集は、いずれゆつくり拝読させて戴くつもりです。まずは、御礼まで。草々。

十八日

井原退蔵

木戸一郎様

一枚の葉書はがきの始末に窮して、机の上に置きそれに向ってきちんと正坐してみても落ち附かず、その葉書を持つて立ち上り、部屋の中をうろうろ歩き廻つてみても、いよいよ途方に暮れるばかりで、いつそ何気なさそうな顔をして部屋の隅すみの状じょう差さしに、その持てあました葉書を押し込んで、フンといった気持で畳の上にごろりと寝ころんでもみましたが、一向に形が附かず、また起き上つてその葉書を状差しから引き抜き、短かすぎる文面を小声で読んで、淋しく、とうとう二つに折つて、懐ふところ深くねじ込み、どうやら少し落ち附いた気持になつて、机に向い、またもやあなたにこんな失礼な手紙を書きたためて居ります。先日は、実に、だらしない手紙を差し上げ、まことに失礼いたしました。あの夜、あの手紙を書き上げて、そのまま翌あくる朝まで机の上に載せて置いたならば、或あるいは、心が臆して来て、出せなくなるのではないかと思ひ、深夜、あの手紙を持って野道を三丁ほど、煙草屋の前のポストまで行つて来ましたが、ひどく明るい月夜で、雲が、食べられるお菓子お菓子の綿のように白くふんわり空に浮いていて、深夜でもやつぱり白雲は浮いて、ゆるやかに流れているのだという事をはじめて発見し、けれどもこんな甘い発見に胸を躍らせるのも、もうこの後はあるまい、今夜が最後だ、最後だ、最後だと、一步一步、最後だという言葉

ばかりを胸の中で呟きつづけて家へ帰りました。翌る朝、朝ごはんを食べながら、呻くばかりでありました。くだらない手紙を差し上げた事を、つくづく後悔しはじめたのです。出さなければよかった。取返しのつかぬ大恥をかけた。たった一夜の感傷を、二十年間の秘めたる思いなどという背筋の寒くなるような言葉で飾って、わあっ！ 私は、鼻持ちならぬ美文の大家です。文章倶楽部の愛読者通信欄に投書している文学少女を笑えません。いや、もっと悪い。私は先日の手紙に於いて、自分の事を四十ちかい、四十ちかいと何度も言つて、もはや初老のやや落ち附いた生活人のように形容していた筈でありましたが、はつきり申し上げると三十八歳、けれども私は初老どころか、昨今やつと文学のにおいを嗅ぎはじめた少年に過ぎなかつたのだという事を、いやになるほど、はつきり知らされました。行きづまつた等、そんな大袈裟な事を、言える柄では無かつたのです。私は、なんにも作品を書いていなかつた。なんにも努めていなかつた。私は、安易な隙間隙間をねらつて、くぐりぬけて歩いて来た。窮極の問題は、私がいま、なんの生き甲斐も感じていないという事に在つたのでした。生きる事に何も張り合いが無い時には、自殺さえ、出来るものではありません。自殺は、かえつて、生きている事に張り合いを感じている人たちのするものです。最も平凡な言いかたをすれば、私は、スランプなのかも知れません。恋愛

でもやってみましょうか。先日あんな、だらしない手紙を差し上げ、それから後で、つくづく自分のだらしなさ、青臭さを痛感して、未だ少しも自分の形の出来ていないのがわかり、こんな具合では、もういちどはじめから全部やり直さなければなるまい、けれども一体、どこから手をつけて行けばいいのか、途方に暮れて、愚妻の皺しわの殖えたソバカスだらけの顔を横目で見て、すさまじい気が致しました。私は、自分に呆あきれました。そうして、けさは又、あなたから、たいへん短いお言葉をいただき、いよいよ自分に呆あきれました。先日の私の、あんな、ふざけた手紙には、これくらいの簡単な御返事で適当なのだろうと思ひ知りました。決して、お怨みしているのではございません。とんでも無いことでありませぬ。その点は、なにとぞ御放念下さい。私は、けさの簡単なお言葉のお言葉に依よつて、私の身の程を、はつきり知らされたのです。かえつて有難く思つて居ります。こうして書いてあるうちにも、だんだんはつきり判つて来ます。つまり、けさ私がお葉書をいただいて、その葉書の処置に窮して、うろろうしたのは、自分の身の程を知らされて狼狽ろうばいしていただけの事でありました。少しは私にも、作家としての誇りもあつたのでしよう、その誇りのやり場に窮して、うろろうあのお葉書を持ち廻つていたのに違いありません。私は、はじめから、やり直します。さらに素直に、心掛けます。

「華嚴」を、あれから、もう一度、ゆつくり読みかえしてみました。最初、お照が髪を梳すいて抜毛を丸めて、無雑作に庭に投げ捨て、立ち上るところがありますけれど、あの一行半ばかりの描写で、お照さんの肉体も宿命も、自然に首肯出来ますので、思わず私は微笑ほほえみました。庭の苔こけの描写は、余計のように思われましたけれど、なお、もう一度、読みかえしてみるつもりであります。雨後の華嚴の滝のところは、ただもう、にこにこしてしまいました。滝のしぶきが、冷く痛く頬に感ぜられました。お照も細く見えた、という結末の一句の若さに驚きました。女体が、すつと飛ぶようにあぎやかに見えしました。作者の愛情と祈念が、やはり読者を救っています。

私は貧乏なので、なんの空想も浮ばず、十年一日の如く、月末のやりくり、庭にトマトの苗を植えた事など、ながながと小説に書いて、ちかごろは、それもすつかり、いやになつて、なんとかしなければならぬと、ただやきもきして新聞ばかり読んでいます。脚気かっけのほうも、最近は、しびれるような事も無く、具合がいいので、五、六日前から少しずつ、酒の稽古をはじめて居ります。酒を飲むと、少し空想も豊富になつて、うれしいのです。酒がこんなに有難いものだとは思わなかつた。酒は不潔な墮落のような気がして、このとしになるまで盃をふくんだ事がなかつたのですが、国内に酒が少し不足になりかけた頃に、

あわてて酒の稽古をするとは、実に、おどろくべき遅刻者であります。私は、いつでも遅刻ばっかりしていました。いつそトラックを一周おくれて、先頭になりましょうか。ひとつ御指導を得て、恋愛の稽古もはじめたい。歴史を勉強しましょうか。哲学とやらは如何。語学は。

告白すると、私は、シヨパンの憂鬱な蒼白あおしろい顔に芸術の正体を感じていました。もつと、やけくそな言葉で言う、「あこがれて」いました。お笑いになりますか。海浜の宿の籐椅子とういすに、疲れ果てた細長いからだを埋めて、まつげの長い大きい眼を、まぶしように細めて海を見ている。蓬髪ほうはつは海の風になぶられ、品ひんのよい広い額に乱れかかる。右頬を軽く支えている五本の指は鵲せきれい鳩ひんの尾のように細長く鋭い。そのひとの背後には、明石あかしを着た中年の女性が、ひっそり立っている。呆れましたか。どうも私の空想は月並みで自分ながら閉口ですが、けれども私は本気で書いてみたのです。近代の芸術家は、誰しも一度は、そんな姿と大同小異の影像を、こつそりあこがれた事がある。実に滑稽です。大工のせがれがシヨパンにあこがれ、だんだん横に太るばかりで、脚気を病み、顔は蟹かにの甲羅こうらの如く真四角、髪かみの毛は、海の風に靡なびかすどころか、頭のとっぺんが禿はげて来ました。そうして一合の晩酌で大きい顔を、でらでら油光りさせて、老妻にいやらしくかまっていま

す。少年の頃、夢に見ていた作家とは、まさか、こんなものではありませんでした。本当に、「こんな筈ではなかった」という笑い話。けれども現在の此の私は、作家以外のものでは無い。先生、と呼ばれる事さえあるのです。シヨパンを見捨て、山上憶良に転向しましょうか。「貧窮問答」だったら、いまの私の日常にも、かなりぴったり致します。こんなのを民族的自覚というのでしょうか。

書いているうちに、何もかも、みんな、くだらなくなりました。これで失礼いたします。けさは朝から不愉快でした。少し落ち附いて考えてみたくなりました。なんだか、みんな不安になりました。けれどもお気になさらぬよう。失礼いたしました。

この手紙には、御返事は要りません。お大事に。

六月二十日

木戸一郎

井原退蔵様

前略。

返事は要らぬそうだが御返事をいたします。

君の赤はだかの神経に接して、二三日、自分に（君にではない）不潔を感じて厭いやな気がしていたという事も申して置きます。自分は、君の名を前から知っていました。作品を読んだ事は無かったが、詩人の加納君が、或る会合の席上でかなりの情熱を以て君の作品をほめて、自分にも一読をすすめた事がありました。自分も、そんなら一度読んでみようと思ひながら、今日までその機会が無く、そのままになっていました。先日、君の短篇集とお手紙をもらつて、お礼のおくれたのは自分の氣不精からでもありましたが、自分は誰かの差別なくお礼やら返事やらを書いているわけにも行きません。恩を着せるようにとられても厭ですが、自分は君の短篇集をちよつと覗のぞいてみて、安心していいものがあるように思われましたから、氣も軽くなつて不取敢とりあえずお礼を差し上げたのです。お礼の言葉が短かすぎて君はたいへん不満のようですが、お礼には、誠実な「ありがとう」の一言で充分だと思ふ。他に、どんな言葉が要るのですか。あの時には、自分は未だ君の作品を、ほとんど読んでいなかったのです。

けれどもいまは、ちがいます。自分は君の短篇集を、はじめから終りまで全部読みました。かなりの資質を持った作家だと思ひました。いつか詩人の加納が、君の作品をほめていたが、その時の加納の言葉がいま自分にも、いちいち首肯出来ました。

「光陰」のタッチの軽快、「瘤」のペエソス、「百日紅」に於ける強烈な自己凝視など、外国十九世紀の一流品にも比肩出来る逸品と信じます。お手紙に依れば、君は無学で、そうして大変つまらない作家だそうですが、そんな、見え透いた虚飾の言は、やめていただく。君が無学で、下手な作家なら、井原は学者で、上手な作家という事になるようですが、そんな、人を無意味に困惑させるような言葉は、聞きたくないのです。もし君が、これから自分と交際をはじめるともりであつたなら、まず、そんな不要の言いわけは一言もせぬ事にして、それからにして欲しい。そうで無ければ、自分は交際を願うわけに行かない。

「私は無学で、下手な作家」だと言われると、言われた自分のほうで、自分に不潔を感じてやりきれなくなります。自分だつて、大きい顔をでらでら油光りさせて酒を飲んでいる事があります。君の手紙に不潔を感じたというのではなく、鏡の反射光を真正面に自分のほうに向けられたような気がして、自分の醜さにまごつくのです。おわかりの事と思う。

君の作品に於いても、自分にはたった一つ大きい不満があります。十九世紀の一流品に比肩出来るという、自分の言葉の中にも、自分はその大きい不満を含めていました。君の作品は、十九世紀の完成を小さく模倣しているだけだ、といってしまうと、実も蓋も無くなりませんが、君の作品のお手本が、十九世紀のロシアの作家あるいはフランスの象徴派の

詩人の作品の中に、たやすく発見出来るので、窮極に於いて、たより無い気がするのです。感傷の在りかたが、諦念に到達する過程が、心境の動きが、あきらかに公式化せられています。かならずお手本があるのです。誰しもはじめは、お手本に拠つて習練を積むのですが、一個の創作家たるものが、いつまでもお手本の匂いから脱する事が出来ぬというのは、まことに腑甲斐ない話であります。はつきり言うと、君は未だに誰かの調子を真似していません。そこに目標を置いていくようです。「芸術的」という、あやふやな装飾の観念を捨てたらよい。生きる事は、芸術ではありません。自然も、芸術ではありません。さらに極言すれば、小説も芸術ではありません。小説を芸術として考えようとしたところに、小説の墮落が胚胎していたという説を耳にした事がありますが、自分もそれを支持して居ります。創作に於いて最も当然に努めなければならぬ事は、「正確を期する事」であります。その他には、何もありません。風車が悪魔に見えた時には、ためらわず悪魔の描写をなすべきであります。また風車が、やはり風車以外のものには見えなかつた時は、そのまま風車の描写をするがよい。風車が、実は、風車そのものに見えているのだけけれども、それを悪魔のように描写しなければ「芸術的」でないかと思つて、さまざま見え透いた工夫をして、ロマンチックを気取つている馬鹿な作家もありますが、あんなのは、一生かかつたつて何

一つ掴めない。小説に於いては、決して芸術的雰囲気ねらつては、いけません。あれは、お手本のあねさまの絵の上に、薄い紙を載せ、震えながら鉛筆で透き写しをしているような、全く滑稽こっけいな幼い遊戯であります。一つとして見るべきものがありません。雰囲気醸成を企図する事は、やはり自洩じしやくであります。「チエホフ的に」などとしても意識したならば、かならず無慙むざんに失敗します。言わでもの事であつたかも知れません。君も既に一個の作家であり、すべてを心得て居られる事と思いますが、君の作品の底に少し心配なところがあるので、遠慮をせずに申し上げました。無闇むやみに字面じづらを飾り、ことさらに漢字を避けたり、不要の風景の描写をしたり、みだりに花の名を記したりする事は厳に慎しみ、ただ実直に、印象の正確を期する事一つに努力してみて下さい。君には未だ、君自身の印象というものが無いようにさえ見える。それでは、いつまで経つても何一つ正確に描写する事が出来ない筈です。主観的たれ！ 強い一つの主観を持ってすすめ。単純な眼を持って。複雑という事は、かえつて無思想の人の表情なのです。それこそ、本当の無学です。君は無学ではありません。君の作品に於いても、根強い一つの思想があるのに、君は、それを未だに自覚していません。次の箴言しんげんを知っていますか。

「エホバを畏おそるるは知識の本もとなり。」

多少、興奮して、失敬な事を書いたようです。けれども、若いすぐれた資質に接した時には、若い情熱でもって返報するのが作家の礼儀とも思われます。自分は、ハンデキャップを認めません。体当りで来た時には、体当りで返事をします。

今日は、君の作品に就いてだけ申し上げました。君のお手紙の言葉に対しては、次の機会にゆつくりお答えしたいと考えています。君の二通の手紙は、君の作品に較べて、ひどく劣っています。自分がもし君のあの手紙だけを読んで君の作品に接していなかったら、自分は君に返事を書かなかつたろうと思えます。君は、嘘ばかり書いていました。次の機会に、もつとくわしく申し上げます。長くなりますので、今日の手紙は、これだけで打ち切ります。

よい友人が得られそうなので、自分も久し振りに張り合いを感じています。やり切れなくなったら、旅行でもしてみたら、どうですか。不一。

二十五日

井原退蔵

木戸一郎様

謹啓。

御手紙を、繰り返し拝読いたしました。すぐにはお礼状も書けず、この三日間、溜息ためいきばかりついていました。私はあなたのお手紙を、かならずしも聖書の如く一字一句、信仰して読んだわけではありません。ところどころに、やっぱり不満もありました。小説の妙みようけつは、印象の正確を期するところにあるというお言葉は、間髪をいれず、立派でございましたが、私の再度の訴えもそこから出発していた筈であります。「たしかな事」だけを書きたかったと私は申し上げた筈でした。自分の掌で、明確に知覚したものだけを書いて、置きたかった、と言いました。けれども、このごろ私には、それが出来なくなりました。理由は、あります。けれども具体的には申し上げません。私は、それをあなたに訴えた筈です。けれどもあなたは、私の手紙を全然黙殺してしまいました。そうして、あなたご自身のお得意のテエマだけを一つ勝手にえらちねんで、立派な感想を述べました。けれども、私はそのテエマに就いての講義は、ちつとも聞きたくなかったです。古いなあ、とさえ思いました。私の聞きたい事は、そんな、上品な方法論ではなかったのです。もつと火急の問題であります。この次の御手紙では、かならず、その問題に触れてお答え下さい。きつと、お願い致します。

おゆるし下さい。御好意に狎なれて、言いたい放題の事を言いました。きつと、あなたは烈火のようにお怒りでしょう。けれども私は、平気です。

「エホバを畏るるは知識の本なり。」いい言葉をいただきました。私は、これから、あなたに対して、うんと自由に振舞います。美しい、唯一の先輩を得て、私の背丈せたけも伸びました。

さて、それでは冒頭の言葉にかえりますが、私が、この三日間、すぐにはお礼も書けず、ただ溜息ばかりついていたというわけは、お手紙の底の、あなたの意外の優しさが、たまらなかつたからであります。失礼ながら、あなたは無垢むくです。苦笑なされるかも知れませんが、あなたの住んでいらつしやる世界には、光が充満しています。それこそ朝夕、芸術的です。あなたが、作品の「芸術的な雰囲気」を極度に排撃なされるのも、あなたの日常生活に於いてそれに食傷して居られるからでもないか知らとさえ私には思われました。私は極端に糠味ぬかみそ噌そくさい生活をしているので、ことさらにそう思われるのかも知れませんが、五十歳を過ぎた作家が、おくめんも無く、こんな優しいお手紙をよくも書けたものだど、呆然ぼうぜんとしました。怒って下さい。けれども絶交しないで下さい。私は、はっきり言うと、あなたの此の優しい長い手紙が、気に食わぬのです。葉書の短い御返事も淋さびしいのですが、

こんなのにのんきにいたわられても閉口です。私の作品には、批評の価値さえありません。作品の感想などを、いまさら求めていたのではありません。けれども、手紙の訴えだけに耳を傾けて下さい。少しも嘘なんか書きませんでした。どこが、どんなに嘘なのでしょう。すぐに御返事を下さい。

わがままは承知して居ります。けれども、強い体当りをしたなら、それだけ強いお言葉をいただけるようでありますから、失礼をかえりみず口の腐るような無礼な言いかたばかり致しました。私は、世界中で、あなた一人を信頼しています。

御返事をいただいてから、ゆっくり旅行でもしてみたいと思つて居ります。「へちまの花」の印税を昨日、本屋からもらいましたので。なおまた、詩人の加納さんとは、未だ一度もお逢いした事はありませんが、あなたから、機会がございましたら、木戸がよろこんでいたとおっしゃって下さい。加納さんは、私と同郷の、千葉の人なのです。頓首^{とんしゅ}。

六月三十日

木戸一郎

井原退蔵様

拝復。

君の手紙は下劣でした。お答えするのも、ばからしい位です。けれども、もう一度だけ御返事を差し上げます。君の作品を、忘れる事が出来ないからです。

自分は、君の手紙を嘘だらけだと言いました。それに対して君は、嘘なんか書かない、どこがどんなに嘘なのかと、たいへん意気込んで抗議していたようですが、それでは教えます。自分は、君の無意識な独り合点の強さに呆れました。作品の中の君は単純な感傷家で、しかもその感傷が、たいへん素朴なので、自分は、数千年前のダビデの唄をいま直接に聞いているような驚きをさ感しました。自分は君の作品を読んで久し振りに張り合いを感じたのです。自分には、すぐれた作品に接するという事以外には、一つも楽しみが無いのです。自分にとって、仕事が全部です。仕事の成果だけが、全部です。作家の、人間としての魅力など、自分は少しもあてにして居りません。ろくな仕事もしていない癖に、その生活に於いて孤高を装い、卑屈に拗ねて安易に絶望と虚無を口にして、ひたすら魅力ある風格を銜い、ひとを笑わせ自分もでれでれ甘えて恐悦がっているような詩人を、自分は、底知れぬほど軽蔑しています。卑怯であると思う。横着であると思う。作品に依らずに、その人物に依ってひとに尊敬せられ愛されようときまざまに心をくだいて工夫し

ている作家は古来たくさんあつたようだが、例外なく狡猾こうかつな、なまけものであります。極端な、ヒステリックな虚栄家であります。作品を発表するという事は、恥を搔く事であります。神に告白する事であります。そうして、もつと重大なことは、その告白に依つて神からゆるされるのでは無くて、神の罰を受ける事であります。自分には、いつも作品だけが問題です。作家の人間の魅力などというものは、てんで信じて居りません。人間は、誰でも、くだらなくて卑しいものだと思つています。作品だけが救いであります。仕事を、するより他はありません。君の手紙を読むと、君は此このころ頃ひどく墮落しているという事が、はつきりわかります。いい加減であります。君はまさしく安易な逃げ路みちを捜してちよろちよろ走り廻つている魑いたちのようです。実に醜い。君は作品の誠実を、人間の誠実と置き換えようとしています。作家で無くともいいから、誠実な人間でありたい。これはたいへん立派な言葉のように聞えますが、実は狡猾な醜悪な打算に満ち満ちている遁辞とんじです。君はいつたい、いまさら自分が誠実な人間になれると思つているのですか。誠実な人間とは、どんな人間だか知つていますか。おのれを愛するが如く他の者を愛する事の出来る人だけが誠実なのです。君には、それが出来ますか。いい加減の事は言わないでもらいたい。君は、いつも自分の事ばかりを考えています。自分と、それから家族の者、せいぜい周囲の、自

分に利益を齎もたらすような具合のよい二、三の人を愛しているだけじゃないか。もつと言おうか。君は泣きべそを掻かくぜ。「汝ら、見られんために己おのが義を人の前にて行わぬように心せよ。」どうですか。よく考えてもらいたい。出来ますか。せめて誠実な人間でだけありたい等と、それが最低のつましい、あきらめ切った願いのように安易に言っている恐ろしい女流作家なんかもあったようですが、何が「せめて」だ。それこそ大天才でなければ到達出来ないほどの至難の事業じゃないか。自分はどうしても誠実な人間にはなり切れなかつたから、せめて罪滅しに一生、小説を書いて行きます、とでも言うのなら、まだしも素直だ。作家は、例外なしに実にくだらな人間なのだと思つています。聖者の顔を装いたがつている作家も、自分と同輩の五十を過ぎた者の中にいるようだが、馬鹿な奴だ。酒を呑まないというだけの話だ。「なんじら祈るとき、偽善者の如くあらざれ。彼らは人に顕あらわさんとて、会堂や大路の角かどに立ちて祈ることを好む。」ちゃんと指摘されています。

君の手紙だつて同じ事です。君は、君自身の「かよわい」善良さを矢鱈やたらに売込もうとしているようで、実にみつともない。君は、そんなに「かよわく」善良なのですか。御両親を捨てて上京し、がむしやらに小説を書いて突進し、とうとう小説家としての一戸を構え

た。気の弱い、根からの善人には、とても出来る仕事ではありません。敗北者の看板は、やめていただく。君は、たしかに嘘ばかり言っています。君は、まずしく痩せた小説ばかりを書いて、そうして、昭和の文壇の片隅かたすみに現われかけては消え、また現われかけては忘れられて、そうして、このごろは全く行きづまって、語学の勉強をはじめようか、日本の歴史を研究し直そうかと考えているのだそうですが、全部嘘です。君は、そんな自嘲の言葉で人に甘えて、君自身の怠惰と傲慢をごまかそうとしているだけです。ちよつと地味に見えながらも、君ほど自我の強い男は、めつたにありません。おそろしく復讐心の強い男のようにさえ見えます。自分自身を悪い男だ、駄目な男だと言いながら、その位置を変える事には少しも努力せず、あわよくばその儘ままでいたい、けれどもその虫のよい考えがあまり目立つても具合が悪いので、仮病の如くやたらに顔をしかめて苦痛の表情よろしく、行きづまった、ぎりぎりに困惑した等と呻うめいているだけの事で、内心どこかで、だれど俺は偉いんだ、俺の作品は残るのだと小声で囁ささやいて赤い舌を出しているというのが、君の手紙の全体から受けた印象であります。君自身の肉体の疲労やら、精神の弛緩しかん、情熱の喪失を、ひたすら時代のせいにして、君の怠惰を巧みに理窟附けて、人の同情を得ようとしている。行きづまった、けれどもその理由は、申し上げません等と、なんという思わせ

振りな懦弱だじやくな言いかたをするのだろう。ひどい圧迫を受けているのだが、けれども忍んで、それは申し上げませんと殊勝な事を言っているようにも聞えますが、誰が一体、君をそんなに圧迫しているのですか。誰ですか？ みんなが君を、大事にしているじゃありませんか。君は慾張りです。一本の筆と一帖の紙を与えられたら、作家はそこに王国つくを創る事が出来るではないか。君は、自身の影におびえているのです。君は、ありもしない圧迫を仮想して、やたらに七転八倒しているだけです。滑稽な姿であります。書きたいけれども書けなくなつたというのは嘘で、君には今、書きたいものがなんにも無いのでしよう。書きたいものが無くなつたら、理窟も何も無い、それつきりです。作家が死滅したのです。救助の仕様もありません。君の手紙を見て、自分は君の本質的な危機を見ました。冗談言つて笑つてごまかしている時ではありません。君は或いは君の仕事にやや満足しているのではあるまいか。やるべきところ迄は、やり果した。これ以上のものは、もはや書けまい、まず、これでよし等と考えているのでしたら、とんでも無い事です。君はまだ、やつとお手本を巧みに真似る事が出来ただけです。君の作品の中に十九世紀の完成を見附ける事は出来ても、二十世紀の真実が、すこしも具現せられて居りません。二十世紀の真実とは、言葉をかえて言えば、今日のロマンス、或いは近代芸術という事になるのですが、それは

君の作品だけでなく、世界の誰の作品の中にも未だはつきり具現せられて居りません。企図した人は、すべて無慙むざんに失敗し、少し飛び上りそうになつては墜落し、世人には山師のように言われ、まるでダヴィンチの飛行機の如く嘲笑せられているのです。けれども自分は信じています。眞の近代芸術は、いつの日か一群の天才たちに依つて必ず立派に創成せられる。それは未だ世界に全く無かつたものだ。お手本から完全に解放せられて二十世紀の自然から堂々と湧ゆうしゆつ出する芸術。それは必ず実現せられる。そうして自分は、その新しい芸術が、世界のどこの国よりも、この日本の国に於いて、最も美事に開花するのだと信じている。君たちと、君たちの後輩が、それを創るようになるだろうと思つている。日本には、明治以来たくさんの作家が出ましたが、一つの創作も無かつたと言つてよい。創作という言葉は、誰が発明したものかわからないけれども、実にいい言葉だと思ふ。多くの人は、この言葉を小説の別名の如く気楽に考えて使用しているようですが、眞の創作は未だに日本に於いて明治以後、一篇もあらわれていないと思ふ。どこかに、かならずお手本の匂いがします。それが愛あい嬌きやうだつた時代もあつたのですが、今では外国の思想家も芸術家も、自分たちの行く路に就いて何一つ教えてはくれません。敗北を意識せず、自身の仕事に幽かすかながらも希望を感じて生きているのは、いまは、世界中で日本の芸術家だけ

かも知れない。仕合せな事です。日本は、芸術の国なのかも知れぬ。

すべては、これからです。自分も、死ぬまで小説を書いて行きます。その時のジャアナリズムが、政府の方針を顧慮し過ぎて、自分の小説の発表を拒否する事が、もし万一あったとしても、自分は黙って書いて行きます。発表せずとも、書き残して置くつもりです。自分は明白に十九世紀の人間です。二十世紀の新しい芸術運動に参加する資格がありません。けれども、一粒の種子は、確実に残して置きたい。こんな男もいたという事を、はっきり書いて残して置きたい。

君は、だらしが無い。旅行をなさるようですが、それもよかろう。君に今、一ばん欠けているものは、学問でもなければお金でもない。勇気です。君は、自身の善良性に行きづまっているのです。だらしの無い話だ。作家は例外なく、小さい悪魔を一匹ずつ持っているのです。いまさら善人づらをしようたつて追いつかぬ。

この手紙が、君への最後の手紙にならないように祈っている。敬具。

七月三日

井原退蔵

木戸一郎様

拝啓。

のがれて都を出ました。この言葉をご存じですか。ご存じだったら、噴き出した筈です。これは、ひどく太って気の毒な或る女流作家の言葉なのです。けれども、此の一行の言葉には、迫真性があります。さて、私も、のがれて都を出ました。懐中には五十円。

私は、どうしてこうなんでしょう。不安と苦痛の窮極まで追いつめられると、ふいと、ふざけた言葉が出るのです。臨終りんじゆうの人の枕もと等で、突然、卑猥ひわいな事を言つて笑いこ

ろげたい衝動を感じるのです。まじめなのです。気持は堪えられないくらいに厳肅にこわばつていながら、ふいと、冗談を言い出すのです。のがれて都を出ましたというのも、私の苦しまぎれのお道化でした。態度が甚はなはだふざけています。だいいち、あの女流作家に対して失礼です。けれども私は今、出鱈目でたらめを言わずには居られません。

あなたから長いお手紙をいただき、ただ、こいつあいかんという気持で鞆かばんに、ペン、インク、原稿用紙、辞典、聖書などを詰め込んで、懐中には五十円、それでも二度ほど紙幣の枚数を調べてみて、ひとり首肯うなずき、あたふたと上野駅に駆け込んで、どもりながら、し、しぶかわと叫んで、切符を買い、汽車に乗り込んでから、なぜだか、にやりと笑いました。

やっぱり、どこか、ふざけた書きかたですね。くるしまぎれのお道化です。御海容ねがいます。

この、つまらない山の中の温泉場へ来てから、もう三日になりますが、一つとして得るところがありませんでした。奇妙な、ばからしい思いで、ただ、うろうろしています。なんにもならなかった。仕事は、一枚も出来ません。宿賃が心配で、原稿用紙の隅に、宿賃の計算ばかりくしゃくしゃ書き込んで破り、ごろりと寝ころんだりしています。何しに、こんなところへ来たのだろう。実に、むだな事をしました。貧乏そだちの私にとっては、ほとんどはじめての温泉旅行だったのですが、どうも私はまだ、温泉でゆっくり仕事など出来る身分ではないようです。宿賃ばかりが気になっていけません。

あなたの長いお手紙が、私をうろうろさせました。正直に申し上げると、あなたのお言葉の全部が、かならずしも私にとって頂門ちようもんの一針いっしんというわけのものでも無かったし、また、あなたの大声叱咤しつたが私の全身を震撼しんかんさせたというわけでも無かったです。決して負け惜しみで言っているわけではありません。あなたが御手紙でおっしゃっている事は、すべて私も、以前から知悉ちしつしていました。あなたはそれを、私たちよりも懷疑が少く、権威もんを以て大声で言い切っているだけでありました。もつともあなたのような表現の態度こ

そ貴重なものだということも私は忘れて居りません。あなたを、やはり立派だと思いました。あなたに限らず、あなたの時代の人たちに於いては、思惟しゐいとその表示とが、ほとんど間髪をいれず同時に展開するので、私たちは呆然とするばかりです。思った事と、それを言葉で表現する事との間に、些さ少しょうの逡しゆん巡じゆん、駈引きの跡も見えないのです。あなた達は、言葉だけで思想して来たのではないのでしょうか。思想の訓練と言葉の訓練とぴったり並走させて勉強して来たのではないのでしょうか。口下手の、あるいは悪文の、どもる奴には、思想が無いという事になっていたのではないのでしょうか。だからあなた達は、なんでもはつきり言い切つて、そうして少しも言い残して居りません。子供っぽい、わかり切つた事でも、得意になつて言つています。それがまた、私たちにとっては非常な魅力なのですから、困ります。私たちは、何と言つてよいのか、「思想を感ずる」とでも言つたらいいのだろうか、思惟が言葉を置きざりにして走ります。そうして言葉は、いつでも戸惑いをして居ります。わかっているのです。言葉が、うるさくつてたまりません。なるほど、それも一理窟だ、というような、そんないい加減な気持で、人の講義を聞いて居ります。言葉は、感覚から千里もおくれているような気がして、のろくさくつて、たまりません。主観を言葉で整理して、独自の思想体系として樹立するという事は、たいへん堂々として

いて正統のようでもあり、私も、あこがれた事がありました。が、どうも私は「哲学」という言葉が閉口で、すぐに眼鏡をかけた女子大学生の姿や、されこうべなどが眼に浮び、やり切れないのです。私があなたのお手紙を読んで、あなたのお考えになっっている事が、あなたの言葉と少しの間隙かんげきも無くぴったりくっついて立っっているのを見事に感じ、これは言葉に依る思想訓練の結果であろうか、或いはまた逆に、思想に依る言葉の訓練の成果であろうか、とにかく永い修練の末の不思議な力量を見たという思いを消す事が出来ませんでした。あなたが、あれは間違いだと思っ、とお書きになると、あなたが心の底から一片の懷疑の雲もなく、それを間違いだと断定して居られるように感ぜられます。私たちは違います。あいつは厭な奴だと、たいへん好きな癖に、わざとそう言い変えているような場合が多いので、やり切れません。思惟と言葉との間に、小さい歯車が、三つも四つもあるのです。けれども、この歯車は微妙で正確な事も信じていて下さい。私たちの言葉は、ちよつと聞くとすべて出鱈目の放言のように聞えるでしょうが、しさいにお調べになったら、いつでもちやんと歯車が連結されている筈です。生活の違いかも知れません。こんな言いわけは、気障きざな事です。悲しくなりました。よしましよ。私が、あなたのお手紙の、ほとんど暴力に近い、それこそ実みも蓋ふたも無い素朴な表現に驚嘆したのも、たしかな事実であ

りますが、その表現せられている御意見には、一つも啓発せられるところが無かったというのも事実でありました。いまさら何を言っているやがると思いました。私たちを、へんなお手本に押し込めて、身動きも出来なくさせたのは、一体、誰だったでしょう。それは、先輩というものであります。心境未だし、デッサン不正確なり、甘し、ひとり合点なり、文章粗雑、きめ荒し、生活無し、不潔なり、不遜なり、教養なし、思想不鮮明なり、俗の野心つよし、にせものなり、誇張多し、精神軽佻けいちよう、浮薄なり、自己陶醉に過ぎず、銜氣げんきおつちよちよい、氣障きざなり、ほら吹きなり、のほほんなりと少し作品を潤達に書きかけると、たちまち散々、寄つてたかつてもみくちやにしてしまって、そんならどうしたらいいのですと必死にたずねてみても、一言の指図もしてくれず、それこそ、縫すがるを蹴とばし張りどばし意気揚々と引き上げて、やつぱりあいつは馬鹿じや等と先輩同志で酒席の笑話の種にしている様子なのですから、ひどいものです。後輩たる者またも亦だらしが無く、すっかりおびえてしまつて、作品はひたすらに、地味にまずしく、躍る自由の才能を片端から抑制して、なむ誠実なくては叶かなうまいと伏眼になつて小さく片隅に坐り、先輩の顔色ばかりを伺つて、おとなしい素直な、いい子という事になつて、せつせとお手本の四君子やら、ほてい様やら、朝日に鶴、田子の浦の富士などを勉強いたし、まだまだ私は駄目です

と殊勝らしく言つて溜息をついてみせて、もつぱら大過なからん事を期しているというよ
うな状態になつたのです。いまでは私は、信じています。若い才能は、思い切り縦横に、
天馬の如く走り廻るべきだと思つています。試みたいと思う技法は、とことんまでも駆使
すべきです。書いて書きすぎるといふ事は無い。芸術とは、もともと派手なものなのです。
けれども私は、もうおそいようです。骨が固くなつてしまいました。ほてい様やら、朝日
に鶴を書き過ぎました。私はあなたのお手紙を読み、いまさら何を言つていやがると思つ
たのは、そのところなのです。もう二十年はやく、あなたがそれを、はつきり言つてくれ
たならば！ けれども、これは愚痴のようです。お手本を破れ、二十世紀の新しい芸術は
君たちの手中に在ると大声で煽動せられても、私は苦しく顔をゆがめて笑つただけでし
た、という事だけを申し上げて、その余の愚痴めいた事は、言わない事にいたしました。う
私もどうやら、あなたと同様に、十九世紀の作家のようであります。

いろいろ失礼な事ばかり申し上げましたが、本当に、私はあなたのお手紙のお言葉の内
容に於いては、何一つ啓発せられるところが無かった、けれども、私は、うろたえたので
す。お手紙を持つて、うろうろしました。のがれて都を出たのです。こいつあいかんとい
う気持で鞆にペン、インク、原稿用紙をつめ込んだのです。なぜでしょう。私は、あなた

の手紙の長さに負けたのです。私ごときに、こんなに長いむだな手紙を下さる、あなたのばかな情熱に狼狽ろうばいしてしまったのです。これだけ長い文章を、もし原稿用紙に書いたら、あなたはたいへんな原稿料を受け取る事が出来るのにと卑いやしい讃嘆の思いをさえ抱きました。あなたは、いま、ひどく退屈して居られるのではなからうかとも思いました。私だけでなく、他の誰かれにも、こんな長い手紙を、むきになって書いて居られるのではないだろうかと思えば、いよいよ狼狽するばかりでありました。私は、あなたを、ずいぶん深く愛しているようです。日常の手紙などで、あなたのもつたいない情熱をこんなに濫費らんひされて、たまるものかという気がしました。私は、自分を愛するよりも、あなたを愛しています。私は苦しくなりました。そうして、つくづく、あなたを駄目な、いいひとだと思いません。大痴という言葉があります、あなたは、それです。底抜けのところがあります。やはりあなたは有数の人物だと思いました。こんどは、もういいから、私にも誰にも、あんな長い手紙は書かないで下さい。閉口です。もう、わかりました。私は作品を書きません。書きます。こいつは、かなわんという気持で私は鞆にペン、インク、原稿用紙、聖書などを詰め込んだのです。

思えば、ばからしい旅でした。何一ついい事ありません。もう今夜で、三泊する事に

なるのですが、仕事は一枚も出来ません。最初の夜から大失敗でした。それをお知らせ致しましょう。私には仕事の腹案が一つも無かったのです。出来れば一つラヴ・ロマンス（お笑いになりましたね。）そいつを書いてみたいという思いが心のどこかの隅に、幽かに疼いていたようです。文学とは、恋愛を書く事ではないのかしらと、このとしになって、ちよつと思ひ当つた事もありましたので、私の最近の行きづまりを女性を愛する事に依つて打開したい等、がらにもない願望をちらと抱いた夜もあつて、こんどの旅行で何かヒントでも得たら、しめたものだちんぷと陳腐な中学生式の空想もあつたのでした。私には旅行がめずらしかつたものですから、それで少し浮き浮きしていたところもあつたのでしよう。あわれな話ですね。若い花やかなインスピレーションが欲しさに、私は大しくじりを致しました。最初の晩、ごはんのお給仕に出た女中は二十七八歳の、足を外八文字にひらいて歩く、横に広いからだのひとでした。眼が細く小さく、両頬は真赤でおかめの面のようでありました。何を考えているのか、どういう性格なのか、よくわからないような人でありました。私は、宿の客が多いか、何月ごろが一ばんいそがしいか、そうか、ねえさんは此の土地の人か、そうか、などと少しも知りたくない事ばかりを無理してお義理に質問しては、女中が答えないさきから首肯うなずいたりしていました。女中は聞かれた事だけを、は

つきり一言で答えて、他には何も言いません。ぶあいそな女中でした。私は退屈しました。ちつとも話題が無くなりました。私は重くるしくなりました。二本目のお銚子ちょうしにとりかかった時、どういう風の吹き廻しか、ふいと坂田藤十郎の事が思い浮んだのです。芸に行きづまり一夜いつわりの恋をしかけて、やつとインスピレーションを得た。わるい事だが、芸のためには、やむを得まい。私も実行しよう。すぐに屹きと眉まゆを挙げて、女中さん、と声の調子を変えて呼びかけました。君を好きなんだ、とか何とか自分でも呆れるくらい下手な事を言つて、そつと女中の手を握ろうとしたら、ひどい事になりました。女中は、「何しるでえ！」と大声で叫んで立ち上り、けもののような醜みにくい表情をして私を睨にらみ、「あてにならねえ。非常時だに。」と言いました。私は肝きものつぶれるほどに驚倒し、それから、不愉快になりました。「自惚うぬぼれちゃいけない。誰が君なんか本気で恋をするものか。」と私も、がらりと態度を改めて言つてやりました。「ためしてみたのだ。むかし坂田藤十郎という偉い役者がいてね、」と説明しかけたら、また大きな声で、「いい加減言うじやあ。寄るな！ 寄るな！」とわめいて両手を胸に当て、ひとりで身悶ももえするのですが、なんとも、まずい形でした。私は酔よいも醒さめ、すっかりまじめな気持になつてしまつて、「誰も君に寄りやしないじやないか。坐り給え。僕が悪かつたよ。銃後の女性は

皆、君のようになつかりしていなければいけないね。」などと言つてほめてやりましたが、女中は、いかにも私を軽蔑し果てたというように、フンと言つて、襟えりを掻き合せ、澄まして部屋から出て行きました。私は残つたお酒をぐいぐい呑み、ひとりでごはんをよそつて食べましたが、実にばからしい気持ちでした。藤十郎が、こんなひどい目に遇うとは、思ひも設けなかつた事でした。とかく、むかしの伝説どおりには行かないものです。「何しるでえ！」には、おどろきました。インスピレーションも何もあつたものではありません。これでは藤十郎のほうで、くやしく恥はずかしくて形がつかず、首をくくらなければなりません。その夜、お膳ぜんを下げに来たのも、蒲団ふとんを伸べに来たのも、あの外八文字ではありませんでした。痩せて皮膚のきたない、狐きつねのような顔をした四十くらいの女中でした。この女中までが私を變に警戒しているようなふうなので、私は、うんざりしました。あの外八文字が、みんなに吹ふ聴いしたのに違いありません。その夜は私も痛憤して、なかなか眠られぬくらいでしたが、でも、翌ある朝になつたら恥はずかしさも薄らいで、部屋を掃除しに来た外八文字に、ゆうべは失敬、と笑いながら軽く言う事が出来ました。やつぱり男は四ちかくになると、羞恥心が多少麻痺まひして凶々しくなつていますものですね。十年前だったら、私はゆうべもう半狂乱で脱走してしまつていたでしょう。自殺したかも知れません。

外八文字は、私がお詫びを言ったら、不機嫌そうに眉をひそめてちよつと首肯しました。たいへん、もつたいぶつています。私は、もう此の女とは一言も口をきくまいと思いましたが、実に、くだらない。きのうは一日一ぱい、寝ころんで聖書を読んでいました。夜も、お酒は呑みませんでした。ひとりで溪流の傍の岩風呂にからだを沈めて、心まずしきものは幸いなるかな、心まずしきものは幸いなるかな、となんども呟いてみましたが、そのうちに大きい声で、いい仕事をしろ、馬鹿野郎、いい仕事をしろ、馬鹿野郎と言うようになりました。それから、小さい声で、いい仕事の出来るように、いい仕事の出来るように、と呟いて、ひどく悲しくなつて真暗い空を仰いで、もつとうんと小さい声で、いい仕事をさせて下さい、と囁くように言いました。溪流の音だけが物^{もの}凄^{すご}くて、——溪流の音と言えば、すぐにきょうのお昼の失敗を思い出し、首筋をちぢめます。実は、きょうのお昼に、また一つ失敗をしたのです。けさ私は、岩風呂でないほうの、洋式のモダン風呂のほうへ顔を洗いに行つて、脱衣場の窓からひよいと、外を見るとすぐ鼻の先に宿屋の大きい土蔵があつてその戸口が開け放されているので薄暗い土蔵の奥まで見えるのですが、土蔵の窓から桐^{きり}の葉の青い影がはいつていて涼しそうです。女が坐っているのです。奥に畳が二枚敷かれていて、簡単服を着た娘さんが、その上にちゃんと行儀よく坐つて縫いものをし

ているのでした。悪くないな、と思いました。丸顔で、そんなに美人でもないようですが、でも、みどりの葉影を背中に受けてせつせと針仕事をしている孤独の姿には、処女の気品がありました。へんに気になつて、朝ごはんの時、給仕に出て来た狐の女中に、あの娘さんは何ですか、とたずねてみました。狐の女中は、にこりともせず、あれは近所のお百姓の娘さんで毎日あそこで宿の浴衣ゆかたや蒲団まくらを繕つくろっているのです、いいひとが出征したので此頃さびしそうですね、と感動の無い口調で言つて、私の顔をまっすぐに見つめて、こんどは、あの人に眼をつけたのですか、と失敬な事まで口走るのです、私も、むつとしました。すくなくとも君たちよりは上等だね、と言つてやろうかと思いましたが、慄こらえて、ただ苦笑して見せました。お昼頃、廊下の籐椅子に腰かけて谷底の溪流を見おろしていたら、釜かまが淵ふちという、一丈くらいの小さい滝の落ちているあたりに女の人が、しゃがんでいるのにふと気が附いて、よくよく見ると、どうもあの土蔵のひとのようなので、私は、いたたまらなくなりました。淋しそうな人の姿を見ると、私は、自分に何も出来ないのがわかつていながら、何かしてやりたくて、てんでこ舞まいってしまうのです。とても、じつとして居られなくなります。私は立ち上り、浴衣をちゃんと着直して、ハンケチで顔の油を拭い、そうして鞆の中から財布を取り出して懐に入れました。私は旅馴れていないせいか、財布

が気になつてなりません。部屋を出る時は、トイレトへ行く時でも、お風呂へ行く時でも、散歩に出る時でも、かならず懐へ入れて出ます。お金が惜しいというわけではなく、無くなつた時、いろいろな騒ぎになる、その騒ぎがいやなのです。私は岩風呂へ降りて行つて、そこからスリッパのままで釜が淵のほうへぶらぶら何気なさそうに歩いて行きました。女の尻を追い廻す、という最下等のいやな言葉が思い浮びましたが、私の場合は、それとちがうのだというような気もして、そんなに天の呵責かしゃくも感じませんでした。なんとかして一言、なぐさめてやりたかつたのです。女の人は、私のほうをちらと見て、立ち上りました。私はここぞと微笑して、「毎日たいへんですね。」と言ってやりました。女は、え？ と聞き直すように小頸こくびをかしげて私のほうを見て、当惑そうに幽かに笑いました。聞えないのです。急湍きゅうたんは叫喚し怒号し、白く沸々と煮えたぎって跳奔している始末なので、よほどの大声でなければ、何を言つても聞えないのです。私は、よほどの大声で、「毎日たいへんですね！」と絶叫しました。けれども、やっぱり奔湍の叫喚にもみくちやにされて聞えないのです。女は、いよいよ当惑そうに眼をぱちぱちさせて、笑っています。私は、やけくそになつて吠えるようにもういちど、「毎日たいへんですね！」と叫びましたが、女は、やはり、え？ と聞き直すように、私の顔を見つめます。私は、しよげてし

まいりました。毎日たいへんですねという言葉そのものが、いったい何の事やら、わけがわからない、ばからしいもののような気がして来て、不機嫌にさえなりました。私はあきらめて岩にくだけて躍る水沫をしばらく眺め、それから帰りました。部屋へ帰ってから財布が懐に無い事に気が付きうろたえました。きつと釜が淵のあたりに落したのだ。そうして、あの女に拾われてしまったのだと、なぜだか電光の如くきらりと思ひ込んでしまいました。きつとあの人には盗癖があつて、拾つても知らぬ振りをしているのだ。あんな淋しそうな女には、意外にも盗癖があるものだ。けれども私は、ゆるしてやろう。などと少しロマンチックな興奮を取り戻して、部屋を出てまた岩風呂のほうへ降りて行く途中で、その財布が私の浴衣の背中のように廻っているのを発見して、しんから苦笑しました。私は、ラヴ・ロマンスをあきらめます。「五十円」という題の貧乏小説を書こうと思います。五十円持って旅に出たまずしい小心者が、そのお金をどんな工合いに使用したか、汽車賃、電車代、茶代、メンソレタム、一銭の使途もいつわらず正確に報告する小説を書こうと思います。

ふざけた事ばかりを書きました。きょうは女房から手紙が来しました。御自重下さい、と書かれていましたので、げっそり致しました。しず子（私のひとり娘です。五歳になりま

す。)もおとなしくお留守番をしています、とも書かれています。どうしても、ここで一篇、小説を書かなければ、家へも面目なくて帰れない気持です。毎日こんな、だらしない事では、どう仕様もございませぬ。

どうやら今夜の手紙も、しどろもどろ(あなたの言葉で言えば、嘘だらけ)の手紙になりました。かなぶんぶんが、次から次と部屋へはいつて来て、どうも落ちついて書けませぬ。この部屋は、この宿のうちで最下等の部屋のようにあります。襖ふすまの絵が、全然なつていません。一本の梅の枝に、鶯うぐいすが六羽ならんとまつている絵があります。見ていると、腹が立つて来ます。ひどい絵です。

だらだら勝手な事ばかり書いて来ました。いちいちお読み下さったとしたら恐縮です。でも、もう怒らないで下さい。あなたは、すぐ怒るからいけません。もう、あんな長い堂々のお手紙ばかりはごめんですよ。

ご存じですか？ 私は、あなたとこんな手紙の往復が出来て、幸福なんですよ。私は、二十も若くなりました。草々頓首。

七月七日深夜。

木戸一郎

井原退蔵様

木戸君。

やっぱり自分のほうが、君より役者が一枚上だと思った。君は、なんのканのと言いな
がらも、とにかく仕事をはじめの気になったじやないか。自分の長い手紙も、決してむだ
ではなかつたのです。作家は、仕事をしなければならぬ。ひよつとしたら自分も、二三日
中に旅に出る事になるかも知れない。その時には君の宿へも立ち寄ってみたいと思ってい
る。面白い宿です。外八文字は、案外、君に気があるのかも知れぬ。もういちど話かけて
みたら、どうですか。不取敢、とりあえず短い葉書を。不一。

七月九日

井原退蔵

謹啓。

しばらく御無沙汰して居りました。仕事を一段落させてから、ゆっくりお礼やらお詫び
やらを申し上げようと思つて、きょうまで延引してしまいました。おゆるし下さい。言い

にくい事から、まず申し上げますが、あの温泉宿の支払いをお助け下さって、ありがとうございます。存じます。たしか二十円お借りしたと覚えて居りますが、小為替こがわせにて同封して置きましたから、よろしくお願い致します。私も「へちまの花」の印税がはいったばかりのところですからお金持であります。お気を悪くなさらず笑ってお納め下さい。貧乏していると、へんに片意地になるもので、どんな親しい人からでも、お金の世話になりたくないものです。はばかりながら人に不義理はしていねえ、という事だけが、せめてもの唯一の誇りのようであります。その誇り一つで生きているものです。どうか、お怒りなさらず、お納め下さい。あの山の中の、つまらぬ温泉宿に、あなたがおいでになったと女中から通知された時には、私は思わず、ひえっ！ という奇妙な叫び声を挙げました。あなたもずいぶん滅茶なひとだと思いました。お葉書に書いてはございましたが、まさかと思つて、少しもあてにはしていませんでした。あなたの年代の作家たちは、へんに子供みたいに正直ですね。私は呆れて、立ち上つたら、「ひでえ部屋にいやがる。」と学生みたいな若い口調で言つて、のっそり私の部屋へはいつて来られた。思つていたよりも小柄で、きれいなじいさんでした。白い歯をちらと見せて笑つて、「鶯が六羽いるというのは、この襖ふすまか。なるほど、六羽いる。部屋を換えたまえ。」とせかせか言いました。あなたは、あの時、てれていた

のではないでしょう。それがくしに、襖の絵の事などおっしゃったのではないのでしょうか。私が意味もなく、「はあ」と言ってお辞儀したら、あなたも、ぎゅっとまじめになつて、「僕は井原です。仕事の邪魔になつたようですね。」と、はじめて、あなたの文章と同じ響きの、強い明快の調子で言いました。

「いいえ、それどころか。」私は、てんでこ舞いをしていました。そうして、えへへ、と実に卑しいお追ついで従しよ笑ういをしたようです。本当に、仕事の邪魔どころか、私は目がくらんで矢庭やにわに倒立さかだちでもしたい気持でした。私はあの日、もう東京へ帰ろうかと思つていたのです。一週間も滞在して、いちまいも書けず、宿賃が一泊五円として、もうそろそろ五十円では支払いが心細くなつていますし、きようあたり会計をしてもらつて、もし足りなかつたら家へ電報を打たなければなるまい、ばかな事になつたものだど、つくづく自分のだらし無さに呆れて、厭いと気がさしていた矢先に、霹へきれき靨えの如くあなたが出現なされたので、それこそ、実感として「足もとから鳥が飛び立つた」ような、くすぐつたい、尻餅しりもちをついてみたい程の驚きを感じたのです。

それから二日間、あの宿で、あなたと共に起居して、私は驚嘆の連続でした。なんという達者なじいさんだろうと、舌を巻いた。けれども私は、一度も不愉快を感じませんでし

た。とても豊富な明朗なものを感じました。外八文字も、狐も、あなたに対してはまるで処女の如くはにかみ、伏目になっていかにも嬉しそうにくす笑ったりなどするので、私は、あなたの手腕の程に、ひそかに敬服さえ致しました。やはり、あなたは都会の人で、そうして少し不良のお坊ちゃんの面影をどこかに持って居られました。けれども私には、それに依つて幻滅を感ずるところか、かえつて悲しくなつかしく、清潔なものをさえ感じました。あなたは臆するところ無く遊びます。周囲の思惑を少しも顧慮せず、それこそ、ずつかずつか足音高く遊びます。そうして遊びの責任を、遊びの刑罰を、ちゃんと覚悟して、逃げも隠れもせず平然たるものがあります。一言の弁明も致しません。それゆえ、あなたの大胆な遊びは、汚れがなくて綺麗に見えます。私たちは、いつでもおっかなびつくりで、心の中で卑怯な自問自答を繰り返しかえし、わずかに窮余のへんてこな申し開きを捏造し、責任をのがれ、遊びの刑罰を避けようと致しますから、ちよつとの遊びもたいへんいやらしく、さもしく、けちくさくなつてしまいます。五十を越えたあなたのほうが、三十八歳の私よりも、ずつと若くて颯爽さつそうとしていくという事実は、私にとつて、たしかに驚異でありました。あなたと私のこんな違いは、お金持と貧乏人という生活の懸隔けんかくから起つたのでは無く、あなたが之まで幾十度と無く重大の命の危機を切り抜けて生きて来たこと

いう事から起つたのだ。あなたはいつでも、全身で闘っている。全身で遊んでいる。そうして、ちゃんと孤独に堪えている。私は、あなたを、うらやましく思います。

いかに努めても、決して及ばないものがある。猪いのししと熊とが、まるつきり違つた動物であるように、人間同志でも、まるつきり違つた生きものである場合がたいへん多いと思ひます。猪が、熊の毛の黒さにあこがれて、どんなにじたばたしたつて、決して熊にはなれません。私は、あきらめました。二日あなたのお傍で遊ばせていただき、あなたに、あまり宿賃のお世話になるのも心苦しい事でしたので、私だけ先に、失礼して帰京いたしました。あなたが、あなたは、あれから、信州のほうへお廻りになるとか、おっしゃって居られましたけれど、もうそろそろ涼しくなつてまいりましたから、御帰京なさつて居られる頃と存じます。

夢のような気が致します。二十年間、一日もあなたの事を忘れず、あなたの文章は一つも余さず読んで、いつもあなた一人を目標にして努力してまいりましたが、一夜の興奮から、とうとう手紙を差し上げ、それからはまるで逆上したように遮二無二あなたに飛び附いて、叱られ、たたかれても、きやんきやん言つてまつわり附いて、とうとうあなたと温泉宿で一緒に遊ぶという程の意外な幸福を得たという事は、いま思うと悲しい夢のような

気がするのです。私は狂っていたのかも知れませんが、ずいぶん失礼な手紙も差し上げたよ
うな気がします。私のそんな半狂乱の手紙にも、いちいち長い御返事を下さった先生の愛
情と誠実を思うと、目が熱くなります。だんだん先生とお呼びしても、自分の気持に不自
然を感じなくなりました。もう私の気持が、浪の引くように、あなたから遠くはなれてし
まっているのかも知れません。旅行から帰って、少しずつ仕事をすすめているうちに、私
はあなたに対して二十年間持ちつづけて来た熱狂的な不快な程のあこがれが綺麗さっぱり
と洗われてしまっているのに気が附きました。胸の中が、空のガラス瓶のように涼しいの
です。あなたの作品を、もちろん昔と変わらず、貴いものと思つて居ります。けれども、そ
の貴さは、はるか遠くで幽かに、この世のものでないように美しく輝いている星のよう
です。私から離れてしまいました。私は、これから、こだわらずに、あなたを先生と呼ぶ事
が出来そうです。あなたは大事なおかたです。尊敬とは、こんな侘びしい感情を指して言
うのでしょうか。私は、あなたに甘える事が、どうしても出来なくなりました。あなたは、
生れながらの「作家」でした。私には、野暮な俗人というしつぽが、いつまでもくつつい
ていて、「作家」という一天使に浄化する事がどうしても出来ません。

私のいまの仕事は、旧約聖書の「出エジプト記」の一部分を百枚くらいの小説に仕上げ

る事なのです。私にとっては、はじめての「私小説」で無い小説ですが、けれども、やっぱり他人の事は書けません。自分の周囲の事を書いているのです。いままでの小説の形式に行きづまって、うんざりして、やっとこんな冒険の新形式を試みる事になったのですが、どうやら、きょうで物語の三分の二まで漕ぎつけて調子も出て来たようですから、少し、ほっとしているのです。ちらと青空も見えて来ました。ぎりぎりに行きづまって、くるしまなければ、いつまで経つても青空を見る事が出来ないのだ、いまは、かえって、きのう迄の行きづまりに感謝だ、などと甘い感慨にふけっている形なのです。私は無学で、本当に何一つ知らないのですが、でも、聖書だけは、新聞配達をしている頃から、くるしい時には開いて読んで居りました。一時、わすれていたのですが、こんど、あなたから、「エホバを畏るるは知識の本なり。」という箴言しんげんを教えていただいて愕然がくぜんとしたのです。ずいぶん久しい間、聖書をわすれていたような気がして、たいへんうろたえて、旅行中も、ただ聖書ばかりを読んでいました。自分の醜態を意識してつらい時には、聖書の他には、どんな書物も読めなくなりますがね。そうして聖書の小さい活字の一つ一つだけが、それこそ宝石のようにきらきら光って来るから不思議です。あの温泉宿で、ただ、うろうろして一枚の作品も書けず、ひどく無駄をしたような気持でしたが、でも、いまになって考える

と聖書を毎日読んだという事だけでも、たいへん貴重な旅行であったのかも知れません。聖書を思い出させて下さったのも、また、私に旅行をすすめて下さったのも、すべてあなたであります。やはり私は、あなたに苦しさを訴えてよかったのかも知れません。私は、あなたに救われたのです。いよいよ私は、あなたに甘える事が出来ません。真の尊敬というものは、お互いの近親感を消滅させて、遠い距離を置いて淋しく眺め合う事なのでしょう。私は今は、生れてはじめて孤独です。

「出エジプト記」を読むと、モーゼの努力の程が思いやられて、胸が一ぱいになります。神聖な民族でありながらもその誇りを忘れて、エジプトの都会の奴隷の境涯に甘んじ貧民窟で喧噪と怠惰の日々を送っている百万の同胞に、エジプト脱出の大事業を、「口重く舌重き」ひどい訥弁で懸命に説いて廻ってかえって皆に迷惑がられ、それでも、叱つたり、なだめたり、怒鳴つたりして、やっとの事で皆を引き連れ、エジプト脱出に成功したが、それから四十年間荒野にさまよい、脱出してモーゼについて来た百万の同胞は、モーゼに感謝するどころか、一人残らずつぶつぶ言い出してモーゼを呪い、あいつが要らないおせっかいをするから、こんな事になったのだ、脱出したって少しもいい事がないじゃないか、ああ、思えばエジプトにいた頃はよかったね、奴隷だって何だって、かまわないじ

やないか、パンもたらふく食べられたし、肉鍋には鴨かもと葱ねぎがぐつぐつ煮えているんだ、こたえられねえや、それにお酒は昼から飲み放題と来らあ、銭湯は朝からあったし、ふんどしだつて純綿だつたぜ。「我儕われらエジプトの地に於いて、肉の鍋の側に坐り、飽あまでパンを食くらいし時に、エホバの手によりて、死にたらばよかりしものを、」（十六章三）あの頃、死んだ奴は仕合せさ、モーゼの山師めにだまされて、エジプトから出たばっかりに、ひでえめに逢あつちやつた、ちつともいい事ねえじやねえか。「汝なんじはこの曠野あらのに我等を導きい出して、この全会を飢うえに死なしめんとするなり。」と思いきり口汚い無智な不平ばかりを並べられて、モーゼの心の中は、どんなであつたでしょう。荒野に於ける四十年の物語は、このような奴隷の不平の声で充満しています。モーゼは、けれども決して絶望しなかつたのです。鉄石の義心は、びくともせず、之これを叱咤し統御し、ついに約束の自由の土地まで引き連れて来ました。モーゼは、ピスガの丘の頂きに登つて、ヨルダン河の流域を指差し、あれこそは君等の美しい故郷だ、と教えて、そのまま疲労のため死にました。四十年間、私は奴隷の一日として絶える事の無かつた不平の声と、謀叛むほん、無智、それに対するモーゼの惨澹さんたんたる苦心を書いて居ります。是非とも終りまで書いてみたいのです。なぜ書いてみたいのか、私には説明がうまく出来ませんが、本当に、むきになって、これだけは書いて

て置きたい気がしています。いつか温泉の宿から、「五十円」という小説を書きます等と、ふざけた事を申し上げましたが、恥ずかしい気が致します。いつまでも、あんなテエマで甘えていたら、私は、それこそ奴隷の中の一人になります。肉鍋の傍に大あくらをかいて、「奴隷の平和」をほくほく享樂しているのも、まんざら悪くない気持で、貧乏人の私には、わかり過ぎる程わかつているのですが、でもモーゼの義心と焦慮を思うと、なまけもの私でも重い尻を上げざるを得なくなります。

少し興奮しすぎたようです。きようは朝から近頃になく気持がせいせいしていて慾も得も無く、誰をも怨うらまず、誰をも愛さず、それこそ心頭滅却に似た恬てんたん淡の心境だったので、あなたが話かけているうちに、また心の端あきが麻あさのように乱れはじめ、あなたの澄んだ眼と、強い音声が、ともすると私の此の手紙の文章を打ち消してしまいそうなので、私は片手で、あなたの眼と言葉を必死に払いのけながら、こちらも負けじと一字一字ちらをこめて書いて、いつのまにやら、たいへん興奮して書いていました。

私のいまの小説は、決して今のこの時代の人たちへの教訓として書いているのではなくありません。とんでも無い事です。人に教えたり、人に号令したりする資格は、私には全然ありません。いや、能力が無いのです。私はいつでも自分の触覚した感動だけを書いてい

のです。私は単純な、感激居士こじなのかも知れません。たとい、どんな小さな感動でも、それを見つけると私は小説を書きたくなつたものですが、このごろ私の身边にちつとも感動が無くなつて完全に一字も書けなくなつていたところを聖書が救つてくれました。私には何も、わかりません。世の中の見透しなども出来ません。私は貧しい庶民です。けれども自分ひとりの感動の有無だけは、いつでも正直に表現していたいと思つています。私は、エホバを畏れています。

どうも私は、立派そうな事を言うのが、てれくさくていけません。モーゼほどの鉄石の義心と、四十年の責任感とを持つているのならとにかく、私の心の高揚は、その日のお天気工合等に依つて大いに支配されているような有様ですから、少しもあてになりません。大声で宣言しかけては狼狽わうたいしています。七月の末から雨がつついて、インク瓶にまでかび黴が生えて薄気味わるい程でしたが、やっと久し振りでいいお天気になりました。けれども風が涼しく、そろそろ秋が忍び寄つて来ているのがわかりますね。きょうはこれから庭の畑の手入れをしようと思つています。トーモロコシが昨夜の豪雨で、みんな倒れてしまいました。

雨が永くつづいたせいか、脚がまた少しむくんで来たようで、このごろは酒もやめて居

ります。温泉は、脚気の者にあまりよくないようです。早くよくなって、また二、三合の酒を飲めるようになりたいと思います。お酒を飲まないと、夜、寝てから淋しくてたまりません。地の底から遠く幽かに、けれどもたしかに誰かの切実の泣き声が聞えて来て、おそろしいのです。

そのほか私の日常生活に於いて変った事は、何もございません。すべてが、もとのままであります。心は、いつも動いているのですけれど。

あなたのところへ、こんな長い手紙を差し上げるのも、これが最後かと思われれます。あなたに対する一すじの尊敬の心は絶えず持ちつづけているつもりであります。あなたを愛し、或いは、あなたに甘える事が出来なくなりました。なぜだか出来なくなりました。

私は、あなたの路とはつきり違う路を歩きはじめています。あなたは、美しい作家です。水蓮すいれんのように美しい。私はその美しさを一生涯わされる事が無いでしょう。けれども私は、その水蓮の咲いている池から、少しずつ離れて行きます。私は、面おもてを伏せて歩いているけものようです。私には美学が無いのです。生活の感傷だけです。私は、これから、いよいよ野暮な作品ばかり書いて行くような気がします。なんだか、深く絶望したものがあります。

あなたからいただいたお手紙は、生涯大事に、離さずに、しまつて置きます。
たくさん、おゆるし下さい。再拝。

八月十六日

木戸一郎

井原退蔵様

拝復。

何が何やら、わからぬ手紙をもらいました。二十円は、たしかに受け取りました。自分だつて、君にお金を差し上げるなど失礼な事を考えていたのではない。返して頂くつもりでありました。それに、自分は、お金があり余つて処置に窮するほどの金満家でもありませんから、返してもらつて助かりました。君たちは本当にせぬかも知れぬが、自分の家では、昔からの借銭が残つて月末のやりくりは大変であります。どっちの方が貧乏人なのか、わかつたものでない。君は、二言目には、貧乏、貧乏といつて、悲壯がつているようだが、エゴの自己防衛でなかつたら幸いだ。人に不義理はしていねえ、という事が唯一の誇りだとか言っているが、無理なつき合ひはしたくねえ、というケチな言葉も、その裏にはあり

はしないか。自分は、貧乏人根性は、いやだ。いじいじして、人の顔色ばかり覗のぞいてい
る。自分は君に、尊敬なんか、してもらいたくなかった。お互い、なんの警戒も無しに遊
びたかったのです。それだけだ。

君は、愛情のわからぬ人だね。いつでも何か、とくをしようとしていらいらしている、
そんな神経はたまらない。人に手紙を出すのも、旅行するのも、聖書を読むのも、女と遊
ぶのも、井原と冗談を言い合うのも、みんな君の仕事に直接、役立つようにしたばた工夫
しているのだから、かなわない。そんなに「傑作」が書きたいのかね。傑作を書いて、ち
よつと聖人づらをしたいのだろう。馬鹿野郎。

自分は君に、「作家は仕事をしなければならぬ。」と再三、忠告した筈でありました。
それは決して、一篇の傑作を書け、という意味ではなかったのです。それさえ一つ書いた
ら死んでもいいなんて、そんな傑作は、あるもんじやない。作家は、歩くように、いつで
も仕事をしていなければならぬという事を私は言つたつもりです。生活と同じ速度で、呼
吸と同じ調子で、絶えず歩いていなければならぬ。どこまで行つたら一休み出来るとか、
これの一つ書いたら、自分、威張つて怠けていてもいいとか、そんな事は、学校の試験勉
強みたいで、ふざけた話だ。なめている。肩書や資格を取るために、作品を書いているの

でもないでしょう。生きているのと同じ速度で、あせらず怠らず、絶えず仕事をすすめていなければならぬ。駄作だの傑作だの凡作だのというものは、後の人が各々の好みできめる事です。作家が後もどりして、その評定に参加している図は、奇妙なものです。作家は、平気で歩いて居ればいいのです。五十年、六十年、死ぬるまで歩いていなければならぬ。「傑作」を、せめて一つと、りきんでいるのは、あれは逃げ仕度をしている人です。それを書いて、休みたい。自殺する作家には、この傑作意識の犠牲者が多いようです。

君が、このごろまた仕事をはじめたようになったというのは、自分にとつても力強い事でした。絶えず、仕事をつづけなければならぬ。けれども、その、モーゼの一篇で君の危機が全部、切り抜けられると思つたら、間違いです。一篇の小説で、勝負をきめようという意識は捨てなさい。自分たちは、ルビコン河を渡る英雄ではないのです。こんどの君の小説は、面白そうです。四十年の荒野の意識は、流石さすがに、たっぷりしています。君の感興を主として、濶かたつ達たつに書きすすめて下さい。君ほどの作家の小説には、成功も失敗も無いものです。

あの温泉宿の女中さん達は、自分の拝見したところに依ると、君をたいへん好んでいるようでした。けれども君の手紙に依れば、君は散々さんざんの恥辱を与えられたという事にな

って居りました。嘘ばかり言っている。君は、ことさらに自分を惨めに書く事を好むようですね。やめるがよい。貯金帳を縁の下に隠しているのと同じ心境ですよ。あの、蔵の中の娘さんとも、君は毎晩、散歩していたそうじゃないか。女中さん達が、そう言っていたぜ。キスクらいは、したんじやないか。なるほど、君たちの遊びは、いやらしい。

もう自分に手紙を寄こさないそうだが、自分は、なんとも思わない。友情は、義務でない。また手紙を寄こしたくなったら、寄こすがよい。要するに、自分は、君の言う事を、信用しない事にする。君の言ってる事が、わからないのです。

はつきり言うと、自分は、あの温泉宿で君と遊んで、たいへんつまらなかつた。君はまだ、作家を鼻にかけている。そうして、井原と木戸を、いつでも秤はかりにかけて較くらべてみました。つまらない。

あんまり悪口を言うと、君がまた小説を書けなくなるといけないから、最後に一つだけ、君を歡よろこばせる言葉を付け加えます。

「天才とは、いつでも自身を駄目だと思っている人たちである。」

笑ったね。匆そうそう々。

昭和十六年八月十九日

井原退蔵

木戸一郎様

青空文庫情報

底本：「太宰治全集」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年12月1日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月から1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：高橋真也

2000年4月1日公開

2004年3月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

風の便り

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>